

実験タイム 読んでみよう、視てみよう、
語ってみよう、聴いてみよう。。

5「自分で作ろう名場面」

渡 辺 正 人

さあ、実験タイムの第2部です。ここでは、「自分で作ろう名場面」というテーマで、第1部でとりあげた『ごんぎつね』の一場面を自分で演出してみる、という作業をみんなでやってみましょう。



皆さんの手元にクリアファイルに収められたものがありますね。出してみましょう。まず、兵十のみを描いたイラストと吹き出し、そしてさまざまなフォントやサイズで書いたセリフがかかれた紙がありますね。

図 5-1 基本の絵

ここでやってもらうのは、これらを自分で組み合わせて、自分なりのシーンのイメージを作り上げてもらうことです。これは「本とは何か」ということを体験してもらう目的です。本とは、紙と文字とで単純に出来上がっているようにも思えますが、それ以外にも私たちの五感に訴える何かを持っているものだということが付くためです。

ここで午前中の講演を思い出してみるとよいでしょう。午前中の講演では、本の歴史や形態にさまざまな種類や工夫があったことが先生から話されていました。本が紙(もしくは文字を載せる何か)と文字(または絵とか記号)といったものの単純な組み合わせで出来ているとしたら、何もこんな工夫は必要が無かったはずで、それはいったいどうしてでしょうか。

フォントというのは「書体」のことですが、たとえば書道においても「楷書」「行書」「草書」といった「書体」が昔からありました。書道の「書体」は、運筆という書く技術から必然的に生み出されてきましたが、結局はそこに美を見出しました。西洋においては「カリグラフィー」と呼ばれる装飾文字の伝統がありました。いずれも書を、単に情報の伝達手段としてだけではなく、そこに美術的な美しさを求めた結果作り出されてきたものです。東洋でも西洋でも、文字はもともと「意味」を伝えるためだけのものではなかったのです。

そもそも「文字」とはいったいどういうものなのでしょうか。「文字」は、基本的には「線のまとまり」です。そして、その「線のまとまり」は、「線の太さ」と「線の形」とからなっています。そうした組み合わせは、筆で書く「書」の時代には、それを書く人と強く結びついたものでした。昔から「書は人なり」という言葉がありましたが、「書体」とはその人そのものでもあったのです。しかし、活字の時代になり、「書体」が決められたものになり、書く人と同一ではなくなったとき、「書は人なり」ということは無くなってしまったのでしょうか？

実はやはり無くなってはいないのです。つまり活字を選ぶ、その選択こそがその人をあらわすようになってきているのです。わかりやすくいえば、メールでの顔文字や絵文字の使用があげられます。ディスプレイの中の活字の羅列だけでは素っ気無さすぎ、感情が伝わりにくいと感じているからこそ、そうした顔文字や絵文字を用いて自分の感情やニュアンスまで伝えようとしています。それと同じように、表現しようとする内容と表現しようとする媒体との関係は、今の時代であってもなんら変わることはないのです。

ここで、今度は実験タイムの第1部の絵本の読み聞かせや紙芝居を思い出して見てください。そこでは「語り手」の存在があり、その「語り手」が、文章や絵で描かれた以外の「何か」を伝えてくれました。自分の感情やニュアンスを、どうにかして受け手に伝えたいという欲求は、絵本では「語り手」が、紙芝居では「演じ手」が、メールでは「書き手」が「語り手」と同じ役割を果たそうとするわけです。

この「書き手」と「語り手」が一緒の場合、それはしばしばそれを作った人の表現手段ともなります。この「自分でつくりたい名場面」では、それを体験してみることです。そしてもうひとつ、このとき、私たちは普段忘れがちですが、こうした文字の表現しようとする世界を考えるに当たって大切なのは「レイアウト」ということです。いうまでもなく、「文字」は大概の場合たった一文字ということはありません。まとまった内容を伝えようとする限り、まとまった文章となるのが通例です。そのとき、文字と文字との間隔や行と行の間隔をどれだけ取るか、ページ全体の文章量はどれくらいにするのか、余白はどれくらいとるのか、などといったことが重要な要素になります。

こうしてみると、本というものは、紙と文字によって出来上がってはいますが、そこにさまざまな配慮と工夫と美意識が凝らされているものだということ

がわかります。しかし、私たちはそれを読む時、明確に意識せずに読むことがほとんどです。すでに無意識に「本を読む」という行為を通してそういう情報を読み取っているのだと思われます。

今回の「自分で作ろう名場面」という実験は、その意味で二つの目的があります。ひとつは本とはどういう要素から出来上がっているのかを学ぶこと、もうひとつはそれを実際に自分で作ってみることによって、その要素を吟味し、組み合わせる面白さを体感してもらうこと、です。それでは、皆さん、作業に取り掛かりましょう。自分だけの名場面にチャレンジして見てください。後は本人の自由な発想で場面を演出してもらいます。色を塗ったりセリフの大きさを変えたり、さまざまな工夫で自分の世界を表現してみてください。

(作業中・・・中略)

さて、そろそろ実験タイムは終了です。皆さんの作品を見てゆくことにしましょう。発表に際しては、俳優よろしく、そのセリフを自分で情感をこめて読み上げてみてください。

(各自の発表)

これで全員ですね。みなさん、なかなかうまく発表してくれました。それでは作品を講評してゆきます。まずは、全体的なことから考えて見ます。私が面白く感じたのは、こちらでフォントを用意したにもかかわらず、手書きのセリフを書く人がいたことです。15人の作品のうち、手書き文字を使用したのは4人でした。また、吹き出しをA4の紙からはみ出してレイアウトする人も6人いました。そして顔文字を使った人は6人という結果です。

特に手書き文字を使った4人は全員、A4の紙をはみ出す吹き出しのレイアウトを使っていました。セリフにインパクトを持たせたいとき、活字のフォント

では物足りなかったのでしょうか、A4というサイズをはみ出す強さを持っていたのでしょうか。そう考えると、文字の持つ力というものをよく理解して使いこなしている様子が判ります。顔文字が使用されるのはメール世代というべきでしょうか。

もうひとつ、マンガ的表現で場面を演出する人も目立ちました。5人が顔やセリフに斜線や涙、汗などを書き加えることで感情や状況を表現しようとしています。このグループの特徴は、活字のフォントを使用している点です。一人を除いては、活字のフォントで、しかも吹き出しも画面からはみ出しません。あくまでもフォントを選び、それでは何か足りないのでマンガ的表現が加わったのでしょうか。以下、いくつか紹介してゆきますが、こうした自分自身の「伝えるための工夫」こそが本を成り立たせているのです。



図 5-8 作品1

作品1です。

これは、セリフは手書き文字で、吹き出しははみ出して衝撃とセリフの強さを出しています。ただし、「おまいったのか」はわざと細いフォント文字を使用して声の弱さを表現し、さらに手書きの顔文字を使用して感情を表そうとしていますね。そして、マンガ的表現として頭上の衝撃マークと、目の下を強調して表情を出しています。すべてを使った、なんでもありの表現ですが、それだけに兵十の衝撃を受けた、その心理がよく表されています。



図 5-9 作品2

作品2です。

これも「ごん」と呼びかけるところが手書き文字で、吹き出しははみ出しています。作品1と比べてみると、「ごん」の色の濃さが違いますね。吹き出しの形も違い、衝撃ではなく、とまどいの感情を表現しています。下のセリフは活字ですが、面白いのは1文字ずつフォントの大きさや太さを変えています。これによってセリフのイントネーションや強弱を表現しようとするんですね。フォントを視覚的に非常にうまく使っています。

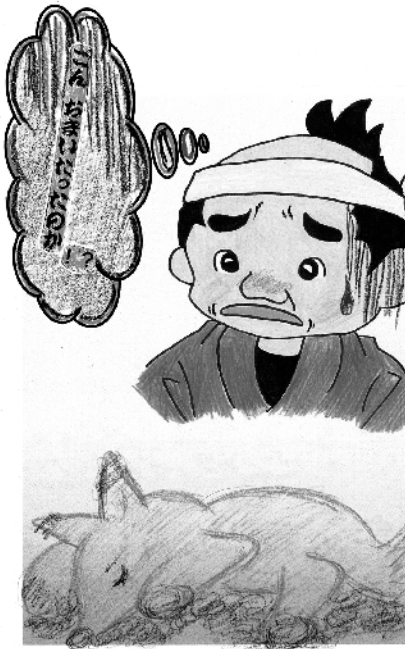


図 5-10 作品3

作品3です。

セリフが活字文字ですが、吹き出しは少しはみ出しています。吹き出しの中に色を入れて、斜がはいり、セリフの表情を出そうとしているのが面白いですね。セリフも少し斜めで強調されてますし。顔には、マンガ的表現として額に斜線、汗が描かれ、兵十の表情も豊かです。何よりも、下部にキツネを入れて、場面をより具体化しようとしています。

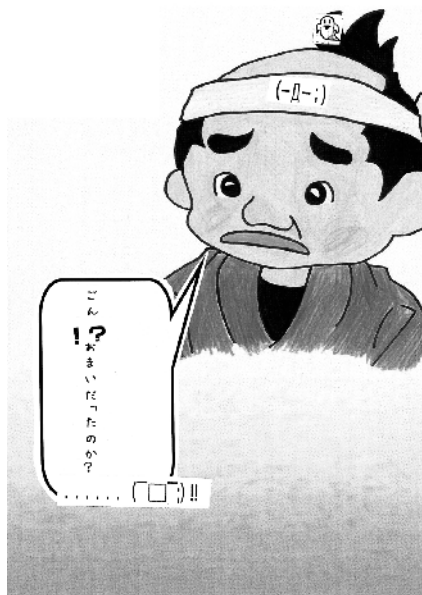


図 5-11 作品4

作品4です。

これは、吹き出しははみ出していないですね。セリフは活字文字ですが、記号を活字よりも大きくして驚き、とまどいが表されています。吹き出しの下に横書きの顔文字を使用して、感情を表現しようとしています。はちまきや頭の上の顔文字や絵文字は、兵十の感情を表そうとしているのですが、正直ちょっと意味がよくわかりません、ごめんなさい。



図 5-12 作品5

作品5です。

これはちょっと面白いですね。セリフは活字文字ですが、フォントや太さを1文字ずつ変えています。作品2もそういう使い方をしていましたが、こちらはもっと進んでいて、活字の配置をばらばらにすることによって、困惑した兵十の気持ちを表そうとしているところが素晴らしいですね。



図 5-13 作品6

時間が来ましたので、全部を講評する事ができません、ごめんなさい。でも、紹介しなかった人のも良くできていました。それぞれの狙いがよく判るものでした。皆さんも作って見て、「本の正体」が少し見えてきたのではないのでしょうか。

ありがとうございました(ToT)/~~~

作品6です。

これもセリフは活字文字ですが、フォントや太さを変えています。絵文字、顔文字も使用しています。これは「おまいったのか」を繰り返して、さまざまなフォントで配置することで、困惑した兵十の気持ちを表そうとしています。リフレインのようにセリフを繰り返していくのを視覚的に表現しようとしているのが素晴らしいです。